

農地の土の匂い

住まいが千葉県八千代市ということもあって、家から見えるところに広大な農地がある。季節ごとに10種類以上の野菜を作って、JAやスーパーに卸している。写真の絵はその農場の一部分を背景に、私が土を掘り返していた農具をテーマにしたものである。



私の祖父は四国愛媛県の山間で、時には山地を開墾しながら農業を営んでいた。農地面積は近隣農家とは比べものにならない。曾祖父が武士であったそうで、明治維新の廃藩置県により、士農工商と身分の上下を定めていた時代の所為であろうか、農業に就いたということであった。それを引き継いだ祖父の農業はすべてが手作業、体力勝負。神奈川県横浜で、空襲で家が消失したこともあって、中学2、3年生を祖父の農家に世話になった。当時、中学には農繁休暇があって、田植え、麦踏み、農耕用の牛の餌やり、また炭焼き小屋の作業などを経験することができた。祖父の鍬で掘り返された畑の土の匂いは、横浜から転入した私には、とても新鮮でわすれられない。祖父が言っていた「肥料が効いているか、土の匂いで解る」と。田植えの時の田の土の匂いは畑の土のとはまた違って、どこか古めかしさを感じさせる思いだった。そのようなことを思い出しながら、今の住まいの庭の隅でキュウリ、やトマトを作ったりして、土の匂いを愉しんでいるが、我が家の土の匂いは祖父の農地のとはどこか違う。土の種類が違うこともあるか、でも施肥の程度は違う。祖父はほんとに熱心な農業者であった、と尊敬している。

最近の農作業は、もうかなり以前から耕運機操作を基本としており、畝を作るところまではこの耕運機に依り、農作物の種類によっては種まき/収穫までも担う。その昔、鍬で土を掘り、畝を作って手で種を撒き、そして手作業で収穫していた農作業とは比べものにならない程、作業効率は高く、身体への負担もより少なく、キツイ農作業、のイメージはなくなっている。それでも植え付け前の作物間の雑草処理、追肥、収穫、時に散水、とかなりの手作業であり、若者が農業を離れる理由になっているようにおもう。作業内容は変わっても農地の土の匂いは我が家の庭の匂いとは違う。

農地の土の匂いを好む農業者がもっと増えて、日本の食料自給率を高くして欲しいものである。

(村上ヨシヒコ-May 2026)